

## 高田平野とその周辺の観光振興における地域資源の活用

田 林 明・石 田 幸 太\*  
伊 藤 真理子\*・梅 原 香 那\*

- |                              |                                       |
|------------------------------|---------------------------------------|
| I はしがき                       | III 上越市の観光振興政策                        |
| II 高田平野とその周辺における観光動向と観光資源の分布 | III-1 上越市第一次・第二次観光振興5か年計画             |
| II-1 観光動向                    | III-2 上越市第三次観光振興5か年計画                 |
| II-2 観光資源の分布と実態              | III-3 上越市における現在の観光振興の試み               |
| II-3 観光資源の特徴                 | IV むすびにかえて-高田平野とその周辺地域における地域資源の観光資源化- |

キーワード：上越市，高田平野，観光振興，観光資源，地域資源，農村空間の商品化  
付箋

## I はしがき

第2次世界大戦後の日本における観光活動の推移について財団法人日本交通公社(2004)は、まず、周遊型観光旅行や慰安型団体旅行などの「みる」観光から、スポーツ旅行や体験旅行などの「する」観光が加わり、さらには保養や休養、避暑や避寒などの「滞在型の旅行」などへと幅が広がったとしている。ただし、これらの観光が時代とともに移り変わってきたのではなく、時や場合によって使いわけられ、しかも特定の階層の人々ではなく、国民大衆がいずれの観光をも享受できるようになってきたと指摘している。さらに近年では、国立公園や国宝級の建造物、名所などといった観光資源性が高いものに注目するのではなく、棚田の景観や都市近郊の里山、都市の中の生活感のある古い町並みなどに注目したり、農山村の景観や産物、食文化などを観光資源化する傾向が強まっている。そしてグリーンツーリズムやエコツーリズムなどが新しい観光形態として注目されている(山村, 2006)。

他方、都市地域であろうと農村地域であろうと、観光的要素を取り入れて地域振興を試みるのが現代の一般的な傾向である(溝尾, 2007)。例えば農村地域に限ってみれば、現代の農村再編の最も重要な要素の1つは、生産を基盤とした農村経済から消費を基盤とした経済への転換であり、この消費に基づく農村経済は多様な活動を含んでいるが、最も視覚に訴える活動が観光業である(Woods, 2005)。現代は農村が観光客の商品になっている時代である(Butler, 1998)。果樹農業地域ではつみ取り園や直売所、宅配サービスなどの観光的要素を取り入れて、地域農業や地域経済を持続的に発展させようという動きはめずらしいことではない(林, 2007)。ここでの課題は、本来観光の対象とさ

\* 教育研究科大学院生

れてこなかった身近な普通の生産活動や、産物、都市・農村景観、日常の生活形態、年中行事などを、新たに観光資源として評価し、それが既存の観光資源と結びついて、連続した多様な、厚味のある観光空間を形成し、地域の活性化や経済振興に結びつく可能性を探ることである。この報告は、地域資源の観光的再評価による地域振興の可能性を、新潟県西部の高田平野とその周辺で探るための予備的な作業である。いずれ、現地調査を重ね、十分な資料と情報を収集して、考察を深めたい。

研究対象地域は観光資源が集中している上越市の中心市街地から自家用車で容易に日帰りできると考えられる高田平野と、その山麓線から5km程度入り込んだ周辺の山地と丘陵地である。現在の上越市は2005年1月にそれまでの上越市と13の町村が合併して成立した。2005年の国勢調査によると人口は208,083、世帯数は69,108であった。14の旧市町村のうちここで対象とするのは、旧上越市と旧柿崎町と旧吉川町、旧大潟町、旧頸城村、旧蒲川原村、旧三和村、旧牧村、旧清里村、旧板倉町であり、中心市街地から離れた旧名立町、旧中郷村、旧安塚町、旧大島村を除いた。

ところで、高田平野は周辺の山地や丘陵から流れ込む河川によって運ばれた砂礫や土砂が堆積してつくられた沖積平野であり、全体の形は三角形をしている。南の新井の市街地から北の柿崎の市街地まで約30km、東西方向で最も広い春日山の麓から三和区山高津までが約14kmである。西の西頸城山地との境は、直江津から新井まで南北に直線状に延びており、東の東頸城丘陵との境は、柿崎から新井まで南南西に延びるが、途中の三和区で東に3kmほどずれている。北の境界は日本海の海岸線で、柿崎から直江津まで南西方向に走っている。海岸線ぞいには潟町砂丘(犀浜砂丘ともいう)が発達し、それより内陸側にはかつては大潟や浮島潟といった大規模なラグーンが存在したが、江戸初期までに干拓されてしまった(頸城村史編さん委員会、1988)。現在では、朝日池や鶴ノ池、天ヶ池、蜘蛛池、中谷内池、長峰池、坂田池など小規模なラグーンが残っているにすぎない。高田平野に流れ込む河川としては、南からの関川、その支流の矢代川と青田川、儀明川、正善寺川が西の西頸城山地から、大熊川と別所川、櫛池川、飯田川、保倉川が東の関田山脈と東頸城丘陵から流れて関川に合流している。そのほかに柿崎川とその支流の吉川がある。平野の南部と南東部は扇状地性の低地であるが、中部から北部は三角性低地となっている。

上越市は交通の要所として栄えてきた。古くは加賀を通して京都にいたる加賀街道と信濃を経て江戸にいたる信州街道、そして越後から奥羽地方にいたる奥州街道が、高田で交わっていた(久保田、1980)。現在は、重要港湾である直江津港があるほか、北陸自動車道路と上信越自動車道路が交わり、JR北陸本線とJR信越本線、そしてJRほくほく線が通っており、2014年には北陸新幹線が開通する予定である。上越市ではすでに述べた2005年の合併により、山や海岸、湖沼などの自然観光資源に加えて、神社・仏閣や公園、城跡などの人文観光資源や温泉や博物館、レジャー施設など様々な観光施設が、1つの行政区のなかに含まれるようになった。さらに、これまでは観光資源としてはあまり意識されてこなかった史跡や農村や都市の景観、産物などがあり、これらの地域資源を観光に活用できる大きな可能性をもっている。

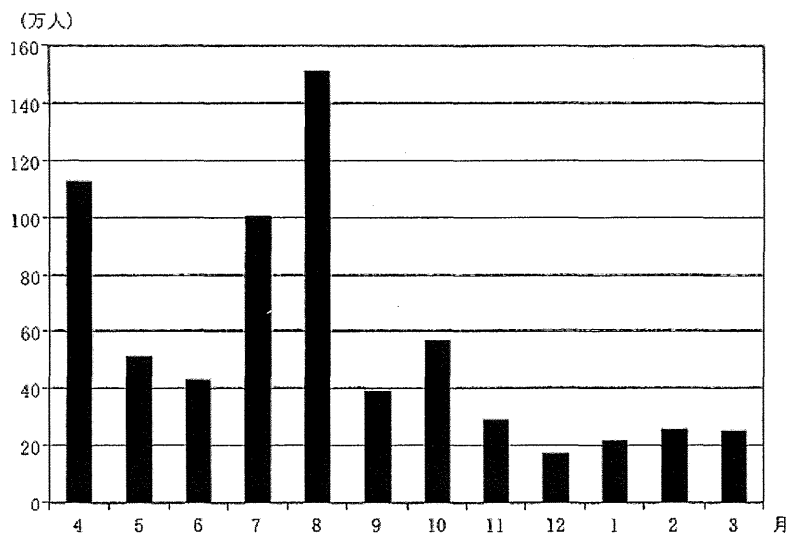
## Ⅱ 高田平野とその周辺における観光動向と観光資源の分布

### Ⅱ-1 観光動向

上越市観光企画課の調査によると、上越市の観光客数は1992年度に463.5万人であったが、その後の日本経済全体の低迷もあり、1999年度には414.1万人と減少してしまった。2001年に就任した現市長の主導もあって観光振興をより重視することになり、2005年には既存の観光施設を管理・運営したり観光イベントに関わる観光振興課と、観光の将来設計・企画を行う観光企画課の2つが設置されることになった。そして、上越市を訪れる観光客数は、2004年度で6,657,590人、2005年度で6,910,570人、そして2006年度には6,726,880人となった。2004年の中越地震や、2007年の中越沖地震の風評被害もあって、近年観光客数は停滞しているが、それでも1990年代よりも60%ほど増加している。

2006年度に上越市を訪れた観光客のうち、県外客は全体の36.4%にあたる2,446,420人であった。それらの中で最も多いのは長野県を中心とした東山・東海地方からの観光客で1,247,080人、群馬県を中心とした関東地方からの観光客も717,260人とかなり多い。これらの観光客が最も多く訪れるのが、たにはま海水浴場やおえつ海水浴場であり、これに次ぐのが高田城百万人観桜会、そして春日山城と林泉寺である。また、東山・東海地方から水族博物館を訪れる観光客も多い。3番目に観光客が多いのは北陸三県で、観桜会と春日山城跡・林泉寺、リージョンプラザ上越を訪れている。その他近畿地方以西や東北地方と北海道からの観光客は少ない。近年、韓国や台湾などを主体とした外国人観光客も増加しているが、2006年度の数は6,430人と少ない。

第1図は上越市を訪れる観光客の月別入込み客数を示したものであるが、最も多いのが夏休みの海



第1図 上越市における月別入込み客数（2006年度）  
上越市産業観光部資料より作成

水浴シーズンの8月で、これに次ぐのが観桜会が開かれる4月、そして海水浴の7月となっている。この3か月の観光客だけで、全体の54.1%を占めることになる。残りの月は20～40万人にすぎず、特に積雪がある12月から2月には少なくなり、周年観光地に近づけることが重要な課題となっている。

## II-2 観光資源の分布と実態

### 1) 観光資源の分布

溝尾(2003)によると旅行者の旅行目的となる観光対象には、広義の観光資源と観光施設Ⅱが含まれ、観光施設Ⅱは観光客が快適に旅行するために、飲食や物品販売、宿泊などのサービスを提供する施設である。広義の観光資源は、狭義の観光資源と人文観光資源Ⅱ（観光施設Ⅰ）と無形社会資源から成り立っている（溝尾、2001）。狭義の観光資源のなかには、「山岳や高原、海岸、動植物といった人間の力では創造できない自然に立脚した」自然観光資源と、「長い時間の経過を経て、価値が出た資源で、今後ともその魅力が減じない」人文観光資源Ⅰ、そして自然と人文が複合されている農村景観や歴史景観といった複合観光資源が含まれる。テーマパークや博物館、文学碑、近代建築物のような施設は観光施設Ⅰとされ、これは人文観光資源Ⅱとも言われる。さらに風俗や衣食住、芸術、言語などは無形社会資源とされる。

この報告では、上記の定義と多少異なるが、国土交通省の観光資源評価委員会の分類に基づいた『上越市第三次観光振興5か年計画』（上越市産業観光部観光企画課、2006）に示された上越市の観光資源のうち主要なものを示すことにしよう（第1表）。ここでは、観光資源は自然観光資源と人文観光資源、観光施設からなると整理されている。自然観光資源は、山岳や高原、湖沼、滝のほか、ハイキングルートや海水浴場とされている。人文観光資源には、溝尾による人文観光資源Ⅰと無形社会資源と考えられる食文化や民俗芸能、祭やイベントが含まれる。観光施設として溝尾による人文観光資源Ⅱ（観光施設Ⅰ）があげられている。

自然観光資源としては日本海沿いの海水浴場、砂丘の背後のラグーン、高田平野周辺の山や高原があげられているが、全体として数は多くない。人文観光資源としては、直江津・春日山地域の古代から戦国期にかけての史跡や神社・仏閣、高田地域の江戸期から明治期までの史跡や仏閣、朝市、そして現代の祭があげられており、この2つの地域からなる旧上越市で圧倒的な数になる。残りの9つの旧町村では、神社・仏閣や史跡などのほか公園や祭などがあげられている。観光施設については、温泉、博物館や記念館、レジャー・アミューズメント施設、キャンプ場、ワイナリー、物産店、体験施設などがあがっている。これも旧上越市に多いが、そのほかの旧町村にも、それぞれの地域資源を活用した施設が、それなりに設けられている。

高田平野とその周辺の観光資源の分布と、2006年度におけるそれぞれの入込み客数をみると（第2図）、海水浴場と、温泉や水族博物館、リージョンプラザ上越（インドアスタジアム、プール、スケートリンク、コンサートホール、科学館などの複合施設）、上越観光物産センターなどの観光施設が年間10～50万人にのぼる入込み客の実績をあげている。人文観光資源でこれに匹敵する入込み客数があるのは、377,020人を数えた春日山城跡・林泉寺のみである。これらは日本海沿いと直江津・春日山地域

第1表 高田平野とその周辺の観光資源

地域	自然観光資源	人文観光資源	観光施設
旧上越市 直江津・春日山地域	たにはま海水浴場、なおえつ海水浴場	五智国分寺、国府別院、光源寺、居多神社、春日山城跡、林泉寺、春日山神社、春日神社、五智公園、親鸞聖人上陸地（居多ヶ浜）、直江津港、平和記念公園（直江津捕虜収容所跡）、正善寺ダム、三八の市、謙信公祭	上越市埋蔵文化財センター、春日山城史跡広場・春日山ものがたり館、上越市立水族博物館、海洋フィッシングセンター、上越観光物産センター
旧上越市高田地域	心のふるさと道（五智国分寺～金谷山）、南葉山	高田城跡、高田公園、金谷山公園、浄興寺、東本願寺高田別院、寺町66か寺、雁木の町並み、二七の市、四九の市、高田城百万人観桜会、上越はすまつり、上越まつり、城下町高田花ロード、上越菊祭、レルヒ祭	小林古径記念美術館、小川未明文学館、雁木通り美術館、旧師団長官舎、日本スキー発祥記念館、金谷山スキー場、岩の原葡萄園、前島密記念館、くわどり湯たり村、南葉高原キャンプ場
柿崎区	米山、中央海水浴場、坂田池	柿崎川ダム、浄福寺、浄善寺、妙蓮寺、一の日市、お引き上げ商工祭、柿崎時代夏まつり、納涼花火大会	上下浜温泉、栢窪温泉、大出口キャンプ場、米山水源カントリークラブ
吉川区	尾神山、六角山、長峰池	親水公園、顕法寺城跡、善徳寺、	長峰温泉、まるたき温泉、よしかわ杜氏の郷、体験交流センター
大潟区	朝日池、鶴の池、天ヶ池、蜘蛛池、中谷内池、御手洗池、鶴の浜温泉海水浴場	円蔵寺、瑞天寺、人魚伝説の碑、県立大潟水と森公園、新堀川公園	鶴の浜温泉、鶴の浜人魚館、大潟キャンプ場
頸城区		大池いこいの森、	坂口記念館、くびき食彩工房、玄福ふるさと村
浦川原区	霧ヶ岳	顕聖寺、日光寺、法定寺、荒沢不動尊、木造十一面観音立像、ふるさと公園、菱田大池公園、虫川城跡	霧ヶ岳温泉ゆあみ、虫川大杉、クラフトパーク「壱の里」、ファーマーランド、まほらの里
三和区	菓師いこいの森、谷内池	風巻神社、石造仏頭、大間城跡、林富永邸	米と酒の謎蔵、味の謎蔵、水科古墳群、川浦代官所跡、ひなた荘、ネーチャーリングホテル米本陣、北代ぶどう園
牧区		ふるさと村自然と憩の森、弘法清水公園	宇津俣温泉、鷹羽温泉、牧歴史民俗資料館、マウンテンリバー川上笑学館
清里区		菅原神社、水嶋磯部神社、坊ヶ池湖畔公園、檜池隕石落下公園	星のふるさと館、清里歴史民俗資料館、坊ヶ池キャンプ場
板倉区	黒倉山、関田山脈、光ヶ原高原、大池、玄藤寺池	塚之宮八幡宮、日吉神社、百観音、聖の窟、人柱供養堂、恵信尼寿塔、山寺薬師、箕冠城跡、延命清水	地すべり資料館、いたくら郷土館、増村村斎記念館、あしんの里記念館、中村十作記念館、やすらぎ荘、板倉農業者トレーニングセンター

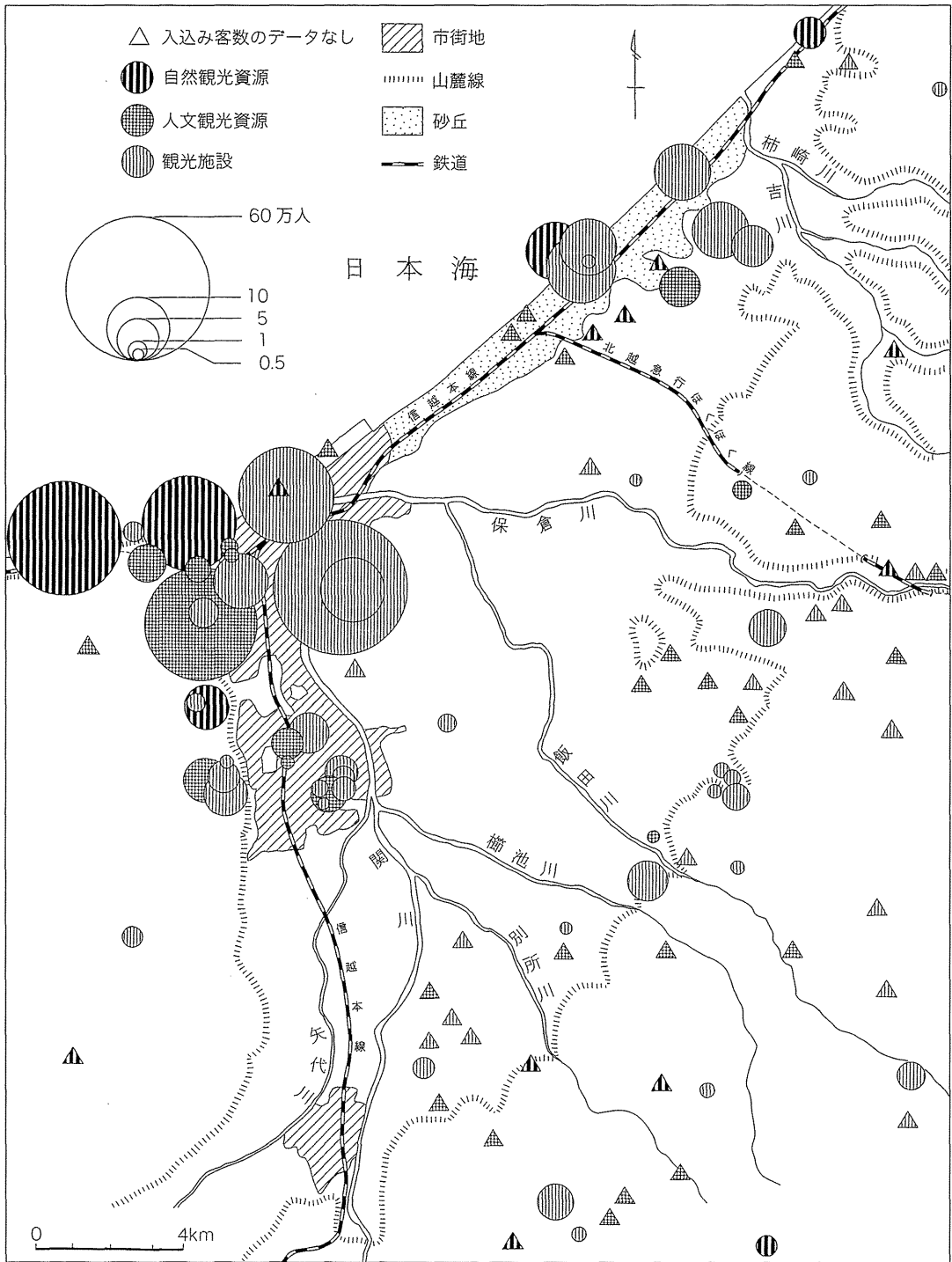
『上越市第三次観光振興5か年計画』より作成

に集中している。高田市街地にも観光資源が多くあるが、入込み客が56,990人の金谷山公園と36,880人の高田公園が目立つ程度である。しかしながら、第2図には示されていないが、高田城跡で4月に行われる高田城百万人観桜祭には798,100人、7月下旬から8月上旬の上越はすまつりには120,000人、直江津地域と高田地域を結んで行われる上越まつりには355,600人、城下町高田花ロードには33,000人の入込み客があるなど、高田地域ではイベントや祭に際しては大きな集客力をもっている。

その他の高田平野や丘陵地域の農村では、人文観光資源や観光施設がそれなりに分布しているにもかかわらず、入込み客が51,390人の岩の原葡萄園と42,600人の山本ぶどう園、41,870人のやすらぎ荘（温泉）のほかは、訪れる観光客は少ない。このように、高田平野とその周辺では、観光客を集めている観光資源は中心市街地と海岸沿いに限られており、せっかくの観光資源が有効利用されていない。次に、主要な観光資源の概略について、別に発表したものと一部重複するが（石田ほか、2008）、現地での観察と観光パンフレット類の記述を参考にして、説明することにしよう。

## 2) 自然観光資源

**なおえつ海水浴場・たにはま海水浴場** 日本海ぞいのこの2つの海水浴場は、長野県や群馬県、山梨県などの内陸県からの海水浴客でにぎわう。砂浜が広く、波が穏やかで、水質も良く、子供から年寄りまで年齢を問わず楽しむことができる。ここでは、マリンスポーツやキャンプができ、海の家



第2図 高田平野とその周辺の観光資源と入込み客数（2006年度）

【上越市第三次観光振興5か年計画】と上越市産業観光部資料より作成

や駐車場、そのほかの施設も完備し、ホテルや民宿などの宿泊施設も充実している<sup>1)</sup>。また、日本海に沈むみごとな夕日を見ることもできる。2006年度にはなおえつ海水浴場には250,450人、たにはま海水浴場には353,070人の入込み客があった。

**光ヶ原高原** 標高700～1100mの高台にあり、遠く佐渡まで見渡せる雄大なパノラマのなかで、自然を満喫することができる。ミズバショウの群生地やブナの原生林があるほか、ふれあい広場では遊具で遊んだり、動物とふれあうこともできる（新潟県上越市、2006）。2006年度の入込み客数は16,070人であった。

**潟町砂丘とラグーン（朝日池、鶏の池、天ヶ池、蜘蛛ヶ池、中谷内池、御手洗池）** 潟町砂丘は柿崎から直江津まで全長は約15km、幅は500mから最大で2.5kmである。最も標高の高いところで40.5mである。海岸沿いには、南端の荒浜から北端の直海浜まで15の「浜集落」が立地している。潟町砂丘では他の日本海側の砂丘と比較すると、早くから農業開拓が進んだ。江戸期から明治期までのこれらの集落の生業は製塩業と漁業であったが、明治末期の塩の専売制度による製塩の禁止と漁業の衰退により、出稼ぎと農業開拓がはじまった。周辺の共有林野を規則的な短冊型に分割した地割りの名残が現在でもみられる（尾留川、1981）。砂丘の内陸側には朝日池を初めとする大小のラグーンが存在する。かつては、潟町砂丘の内陸側には一続きの巨大なラグーンが存在したが、保倉川の旧河床によって大潟と浮島潟の2つに分かれ、それらも江戸初期までに水田化されてしまった。現在のラグーンはその名残であり、灌漑用水源として、特産のじゅんさいの産地として、観光資源として重要な役割を果たしている（中山、1980）。

### 3) 人文観光資源

#### (1) 親鸞関連史跡

**親鸞聖人上陸地（居多ヶ浜）** 親鸞は35歳であった1207年（承元元）に専修念仏禁止によって越後国府に流罪となったが、その時親鸞が上陸した所がこの居多ヶ浜であると伝えられている。現在は公園になっていて、親鸞について詠まれた歌碑やあずま屋、見真堂と呼ばれる記念堂があり、見真堂には室町時代の作といわれる檜材の寄木造りの親鸞の座像が安置されている。

**五智国分寺** 五智国分寺は1562年（永禄5）に上杉謙信が再興したものと伝えられるが、1988年に火災にあったために、現存するものはその後再建されたものである<sup>2)</sup>。上杉謙信当時の国分寺は浄土真宗寺院であったが、江戸期になってから天台宗に変わり、幕府から寺領200石をもらうなど手厚い保護を受けていた。境内には流罪となった親鸞が最初に住んだ竹之内草庵や、上越市で最古の建造物である経蔵、三重塔などが建っている。俳人松尾芭蕉は1689年（元禄2）に「奥の細道」の旅の帰りにこの国分寺に参拝した。境内の芭蕉句碑にはその時の句が刻まれている（花ヶ前、1995）。五智国分寺には明静院とあわせて2006年度には43,720人の入込み客があり、他の史跡と比較して多くの観光客を引きつけている。

**淨興寺** この寺院は高田市街地の寺町に位置するが、1214年（建保2）に親鸞が「教行信証」を著した常陸国稲田の草庵が起源であり、その後下総国や信濃国を経て、上杉謙信の招きによって春日山城下に移った。さらに福島城下への移転を経て、高田城築城とともに現在地に移った。本堂は新潟県内

の浄土真宗寺院では最大・最古であり、境内の本廟や宝物殿には親鸞の頂骨や遺品が保存されている<sup>3)</sup>。

## (2) 上杉謙信関係史跡

**春日山城跡** 春日山城は越後を支配するために、越後守護上杉氏によって南北朝時代に築かれた。守護所のある府中（直江津地域）から南西に4kmの位置にあり、関東・北陸・信濃を監視する要害に位置しており、守護代の長尾氏が代々守っていた。長尾氏は謙信の代に関東管領上杉氏の名跡を継ぐことになるが、この上杉謙信によって春日山城の規模が拡大され、名実ともに天下の名城と呼ばれるようになった。春日山城の特徴は、山頂の本丸跡から山裾まで連続する屋敷群と裾野に巡らされた総延長1,200mの総構え（通称監物堀）であり、戦国時代の山城としての形態をよく表している。春日山城は謙信没後の1579年（天正7）に上杉景勝に引き継がれ、1598年（慶長3）に堀秀治の入城によって上杉氏の時代は終わった。そして、1607年（慶長12）に堀氏が現在の直江津地域に福島城を築いて移ると、春日山城は廃城となった<sup>4)</sup>。

国指定史跡になっている春日山城跡は、中世の山城の姿をほぼそのまま残している貴重な史跡である。本丸・天守台跡がある山頂からは、高田平野全体を一望できる。また、春日山には上杉謙信が出陣前に戦勝を祈願した毘沙門堂や上杉景勝や直江兼統の屋敷跡も残っている。国指定史跡のために新たな駐車場の設置や遺跡の復元などの自由が制限され、さらに駐車場から本丸に至る歩道の整備や適切な案内板や説明板などの設置にも限界がある。

上越市を代表する観光資源だけあって、次に述べる林泉寺とあわせて2006年度には364,120人の入込み客があった。そのうちの78.4%にあたる285,340人が県外からの観光客である。

**林泉寺** 林泉寺は1497年（明応6）に越後国の守護代であった長尾能景が、父重景の菩提を弔うために建立した曹洞宗の寺院である（写真1）。開祖は曹洞宗大本山永平寺を復興した曇英恵応禅師であり、寺名は重景の法名林泉院殿からとり、山号の春日山は上杉家の氏神である春日明神による。



写真1 林泉寺楼門  
2007年9月撮影



建立後40年を経て、上杉謙信は7歳から14歳まで、六世天室光育和尚と七世益翁宗和和尚について修行に励み、このことによって教養の高さと信仰心の深さが培われて、戦国時代に名を馳せるようになった。謙信亡き後景勝が会津へ移封された後は、新たに領主となった堀氏、さらに高田城主の松平氏や榊原氏の菩提所となった。二代将軍秀忠の時代には、寺領224石と「下馬・下乗」の札を立てることのできる格式が与えられ、また、代々の高田城主からは「禁制」状を受けるなど特別な保護を受け、越後の歴史を物語る寺院として今日に至っている<sup>5)</sup>。

林泉寺の入口には、春日山城の搦手門を移築したと伝えられる惣門があり、ここを入ると楼門、鐘楼、本堂がならんでいる。本堂にむかって右に宝物館、左に墓地、裏に室町期の様式を伝える庭園がある(花ヶ前, 1995)。重厚な楼門には、謙信の直筆といわれる「第一義」の扁額の複製が掲げられており、実物は宝物館に肖像画などとともに保管されている。宝物館には上杉謙信やゆかりの大名の遺品などが多数展示されている。また、墓地には上杉謙信や堀家三代の墓所、川中島合戦戦死者の供養塔などがある。

**春日神社** 春日神社は958年(天徳2)に当時の越後国司藤原為信が越後国府内の鎮護を願って、奈良春日大社の分霊を勧進して鉢ヶ峰(現在の春日山)の頂上に創建したものである。1362年(貞治元)に越後国守護上杉憲栄が鉢ヶ峰に築城する際に、鎮守の神として城の北西に遷し祀られることになった。鉢ヶ峰は春日神社の名にちなんで春日山と呼ばれることになった。1381年(永徳元)に越後守護代長尾高景が春日山城拡張に際して、城の鬼門である現在の場所に移築した。そして、後には、支配者の拠点が春日山城から福島城、高田城と移ることによって、春日神社も直江津や高田へ分霊され、それぞれの城の鎮守として現在に至っている<sup>6)</sup>。

現在の春日神社は主要道路から外れた奥まった場所にあり、ここを訪れる観光客は多くない。杉木立が参道を挟んで深い影をつくっていて、昔ながらの雰囲気を残している。本殿に通ずる参道は長く、急勾配の長い石段が設けられている(写真2)。駐車場や案内板が整備されれば、より多くの観光客が訪れる可能性がある。

### (3) 近世城下町関連史跡

**高田城跡** 高田城は1614年(慶長19)に徳川家康の6男である松平忠輝の居城として築かれた。忠輝の舅の伊達政宗が総指揮をとり、関川や青田川、儀明川の流路を変えて堀にするなど難工事が続いたにもかかわらず、わずか4か月余りで完成した。城郭には石垣を用いず土塁をめぐらし、天守閣をつくらずに本丸の櫓を城のシンボルとした(写真3)。さらに、城が城下町よりも低い位置にあるため、排水には十分な注意が払われ、本丸跡には現在でも十分機能する暗渠が張り巡らされている。初代城主忠輝はわずか2年で改易となり、その後も城主の交代が度重なった。1741年(寛保元)に榊原政永が15万石で入城し、以後明治初期の廃藩置県まで榊原家は6代にわたって続いた。

明治期に入って全国の旧城下町が町の発展策として軍隊の誘致運動を行ったが、高田でも1896年(明治29)頃から誘致運動が始まり、1907年(明治40)にようやく実現し、翌年に陸軍第十三師団が城跡に入った(高田市史編集委員会, 1958)。それによって、二の丸と三の丸の土塁が崩され、堀の一部も埋め立てられた。現在は城跡は高田公園となって市民に親しまれている(花ヶ前, 1995)。



写真2 春日神社の参道  
2007年9月撮影

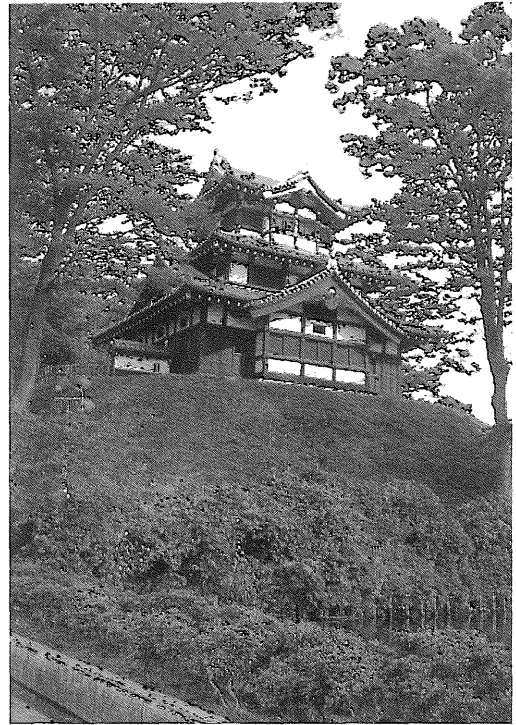
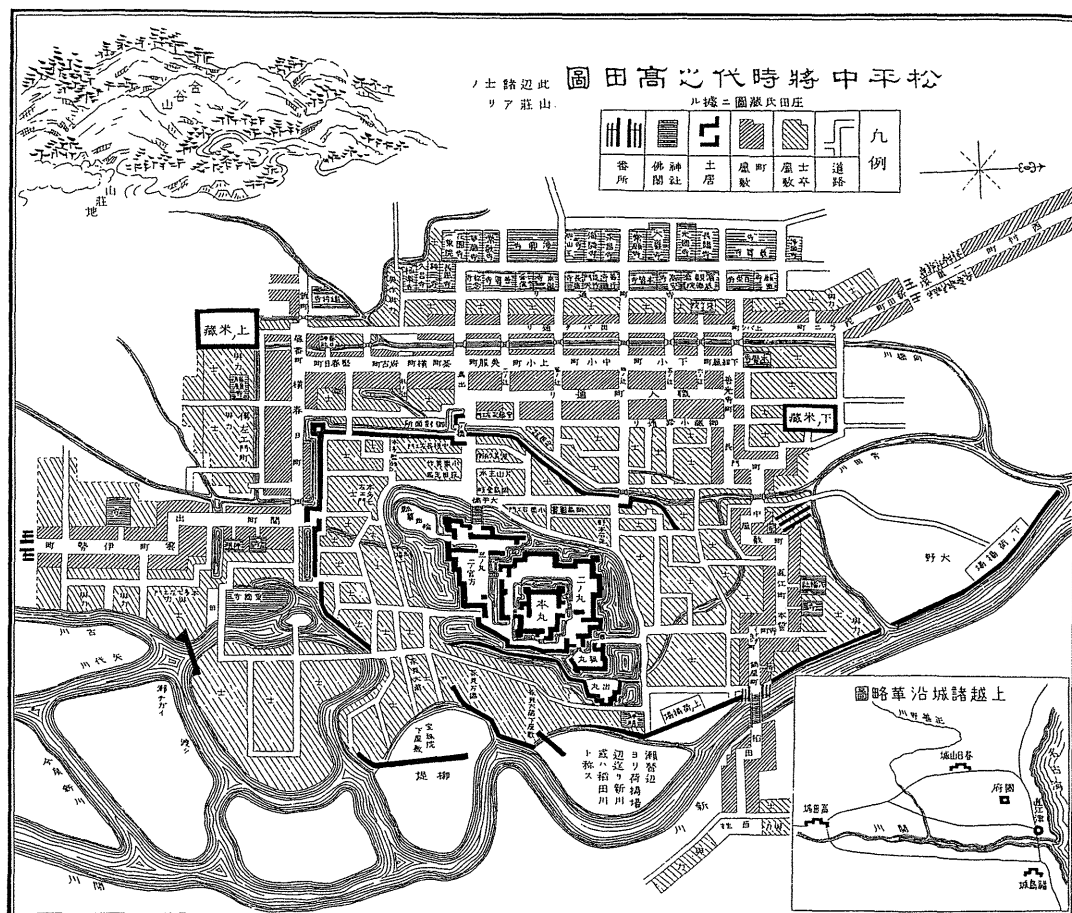


写真3 高田城三重櫓  
2007年9月撮影

1993年に三重櫓が復元され、1・2階が展示室となっており、伊達政宗の手紙や榊原氏歴代の資料などが観覧でき、3階の展示室からは高田公園を見渡すことができる。2006年度の高田公園の入込み客は36,880人で多くないが、4月の高田城百万人観桜会には毎年80万人ほどが、8月の上越はすまつりには12万人が訪れにぎわう。

**高田の町並み** 高田は江戸期には城下町として栄えていた。城下町は城を凹字型に取り囲むように設けられ、城の近くに重臣の屋敷が、その周辺に一般の侍屋敷が配置されていた(新潟県高田市教育会, 1914)。これらの侍屋敷は「家中」と呼ばれた(第3図)。侍屋敷を取りまく西・南・北に町人町、さらにその西には寺町が配置されていた(久保田, 1980)。このような都市は、身分制や軍事・経済上の計画に基づいていた。町の大きな特徴は北国街道をはじめとして南北2kmにもおよぶ大通りが5本も並行していることであった<sup>7)</sup>。町人町には商人や職人が居住し、そのなごりが現在の町屋建築に残っている。さらに、表と裏の2本の寺町通りには現在も66の寺院が残っている。このような江戸期からの町並みが現在も依然として残っているのは明治期以降高田が大きく発展しなかったり、火災や戦災にあわなかったりしたためであるが、日本ではこのような例は少なく、貴重である。町人町には、家々の軒先の私有地にひさしを連ね、公共の通路とした雁木が設けられ、現在でも使用されている(写真4)。その延長は約16kmにもおよび、雪国独特の生活形態の一端を見ることができる。



第3図 高田の城下町

新潟県高田市教育会編（1914）：『高田市史』新潟県高田市教育会より引用

#### (4) イベント・祭<sup>8)</sup>

**レルヒ祭（金谷山，2月中旬）** レルヒ少佐によって日本にスキーが伝えられたことを記念して金谷山で行われる催し物で、当時の様子を再現した一本スキーの実演をはじめ、一流のスキーヤーによる指導、小学生による金谷山太鼓の披露などもある。2005年には23,130人の観光客があったが、2006年度には積雪がなかったので、参加者は8,300人と激減した。

**高田城百万人観桜会（高田公園，4月上旬～中旬）** 高田公園の桜は、1909年（明治42）に第十三師団の設置を記念して在郷軍人会の手で2,200本の桜を植えたのが始まりで、現在公園内には約4,000本の桜がある。三重櫓と桜がぼんぼりの明かりに映え、堀の水面にうつる様子は、日本三大夜桜の1つといわれる。期間中各地から花見に訪れる人々でにぎわう。2006年度には798,100人が花見に訪れ、そのうち41.1%が長野県や群馬県、富山県などからの県外客であった。

**上越はすまつり（高田公園，7月下旬～8月上旬）** 高田城の外堀を埋め尽くすハスは、戊辰戦争の時に凶作により貧窮した高田藩の財政を立て直すために、外堀にハスを植え、レンコンを育てたの



写真4 高田の町並み  
2007年9月撮影

が始まりとされる。現在では東洋一と賞されるハスの見頃にあわせて、文化・スポーツ両面の多岐にわたる行事が行われるのが上越はすまつりである。2006年度には12万人の観光客があったが、大部分は市内および県内客で、県外客は35%ほどであった。

**上越まつり（高田・直江津地域、7月23日～29日）** 高田地域と直江津地域を結びつける祭で、前半は高田地域で、後半は直江津地域を会場として祇園祭が開催される。直江津地域では19の屋台が町内を巡行し、最終日の夜には、屋台に積まれた饂飩米を若者が担ぎ、八坂神社の参道を駆け抜けて奉納し、祇園囃子の音と歓声が夜遅くまで続く。

**謙信公祭（春日山、8月第4土・日曜日）** 上杉謙信の武勇と遺徳を称え、1926年（大正15）に当時の高田市と直江津町、春日村の青年団が主催して始められた。現在では全市をあげての祭となっており、多くの観光客が訪れる。鎧兜に身を固めた謙信とその麾下の武将たちによって、出陣行列や川中島の合戦の再現が行われたりする。2006年には2日間で46,700人の入込み客があったが、2007年にはNHK大河ドラマ「風林火山」に合わせて、上杉謙信役としてタレントのGacktが出演したことで、前年よりも観光客が約3万人も増えた。

#### 4) 観光施設

##### (1) 温泉

**鵜の浜温泉・鵜の浜人魚館** 1958年に帝国石油の資源開発により噴出した温泉で、ナトリウム塩化物泉で海水の成分に類似した食塩を含む無色透明な湯である。入浴することによって皮膚に塩分が付着し、汗の蒸発を防ぐために保温効果が大きくなり、湯冷めしにくい、きりきず、やけど、皮膚病、婦人病などに効能があるとされる<sup>9)</sup>。鵜の浜温泉には11の旅館と4つの民宿があり、そのほかに日帰り入浴施設の鵜の浜人魚館がある。これは温泉とプールを備えた健康増進施設で、その名称は地元で伝わる人魚の伝説によるものである。風呂からは日本海に沈む夕日が展望できる<sup>10)</sup>。鵜の浜温泉

では5～6月の春の観光地引き網、6月のホテル鑑賞会、7月の夏の観光地引網・ちびっこ観光地引網、8月の鵜の浜まつり、9～10月の秋の観光地引網、11月の農林水産業フェスティバルなど多くのイベント・祭を行って観光客の誘致につとめている。2006年度の入込み客は鵜の浜温泉で86,890人、鵜の浜人魚館で135,590人に達した。

## (2) 美術館・博物館・記念館など

**上越市埋蔵文化財センター** 上越市埋蔵文化財センターは、広い展示室を活かして地域の歴史の流れがわかるように出土品を展示し、土器の一部などにもふれることができる施設である。また、学習室には専門書などがそなえられていて、自由に閲覧することができ、生涯学習のための広場もある<sup>11)</sup>。

**ゑしんの里記念館** 上越市板倉区は、親鸞の妻である恵信尼が晩年をすごした場所とされる。ゑしんの里記念館は、恵信尼の「暖かい優しさ」と「しんの強さ」をまちづくりに活かす施設として建設された。ここには恵信尼ゆかりの肖像画や書状、伝記絵、映像などの資料が展示されている多目的施設である<sup>12)</sup>。

**春日城史跡広場・ものがたり館** 春日山史跡広場では、春日山城の延長約1.2kmにおよぶ監物堀や薬研堀、番小屋が復元されている。また、春日山ものがたり館には、スクリーンが設置されており、上杉謙信の生涯や春日山城の成り立ちについて解説したビデオテープを見て学ぶことができる。史跡広場に復元された土塁や堀からは、当時の城の様子を窺うことができる。また、ものがたり館の展望室からは、春日山城の規模の大きさを体感することができる。

**前島記念館** 「日本郵便の父」と呼ばれる前島 密は上越市の出身であり、彼が誕生した上野家の屋敷跡に前島記念館が建てられている。なお、正式名称は日本郵便郵政資料館分館前島記念館である。1930年（昭和5）に当時の前島記念池部郵便局長の坂田五郎氏と稲田郵便局長川崎真治氏が、前島密の業績を顕彰する場所として記念館建設を提唱し、募金を募り、翌年に完成した。当初は上越三等局長会が記念館維持運営にあっていたが、1937年（昭和12）に国に寄付され、通信博物館の分館となった。1989年には建物の全面改装が行われ、大幅な展示替えも行った。なお、館内には前島密の遺品や郵便の歴史的資料、日本や世界の切手などが展示されている<sup>13)</sup>。なお、2006年度の入込み客は8,560人であった。

**旧師団長官舎** 高田地域に陸軍第十三師団が置かれたのは1908年（明治41）であったが、現在も高田地域の大町2丁目には、第十三師団長であった長岡外史が住んでいた師団長官舎が残っている。最初は1910年（明治43）に南城町に建築された。外観は洋館であるが、2階部分は和室になっている。第2次世界大戦後は自衛隊幹部官舎などにも利用されたが、現在は大町に移転され、保存公開されている。

**日本スキー発祥記念館** すでに述べたように、金谷山において日本で最初にスキーを指導したのが、オーストリア軍将校であり、スキーの名手であったレルヒ少佐であった。レルヒ少佐は日露戦争において大國ロシアに勝利した日本陸軍の視察のために、高田の歩兵第58連隊に配属された。レルヒ少佐はスキー教師として招かれたわけではなかったが、長岡外史は彼がスキーの名手であることを知り、

スキーの指導をするように働きかけた。これには、当時の日本陸軍が1902年（明治35）の八甲田山の事故などにより、有効な雪中歩行具の必要性を考えていたことが背景にある<sup>14)</sup>。

金谷山頂にはレルヒ少佐の銅像とともに、赤い三角屋根に白壁の日本スキー発祥記念館がある（写真5）。この記念館は上越市によって1992年に設立されたものである。記念館には当時のスキー板やスキーに関する様々な文献、レルヒ少佐の遺族から寄贈された手記など、貴重な品々が展示されている。また、入口近くにある70インチのスクリーンでは、日本のスキー発祥物語を放映しており、スキーになじみのないものでも、わかりやすくスキーについて学ぶことができるように工夫されている。2006年度の日本スキー発祥記念館の入込み客は4,350人とあまり多くなかった。

**平和記念公園** 1942年にシンガポールを占領した日本軍は、マレー軍総司令官パーシバル中將をはじめとする約65,000人もの連合軍兵士を捕虜とした。日本軍は捕虜を收容するために日本各地に收容所を開設したが、その1つとして東京第四分所を直江津に開設し、約300人のオーストラリア人捕虜を收容した。その場所は、関川右岸と保倉川左岸に囲まれた三角形の土地であった。そこには收容所に改造できそうな古い木造倉庫があったこと、川によって隔離されていて捕虜の管理に便利であったこと、労働現場である信越化学などの工場や荷降ろし作業現場の港に近かったためである（直江津捕虜收容所の平和友好記念像を建てる会、1996）。第2次世界大戦の終結とともに收容所に関する資料は処分されてしまったが、收容所での生活は厳しいものであった。現在、收容所の跡地は平和記念公園となっており、日本とオーストラリア両国の追悼碑やモニュメントが建っているほか、資料館も設けられている。また、資料館の入口には両国の平和と友好を表すコアラの像が設置されている。

### (3) レジャー・アミューズメント施設

**海洋フィッシングセンター** 日本海に突き出した全長185mの栈橋の周りには魚礁が設置され、気軽に安全で快適な海釣りが楽しめる施設である。マダイやシマダイが釣れる。また、自然の岩場を利



写真5 日本スキー発祥記念館  
2007年9月撮影

用したサンビーチがあり、そこで子供とともに磯遊びもできる<sup>15)</sup>。2006年度の入込み客は12,030人であった。

**上越市立水族博物館** 上越市立水族博物館は、400種10,000点の魚類を展示している日本海側有数の規模を誇る水族博物館である(写真6)。厚さ33.5cmという世界最大の1枚ガラスを使用した大回遊水槽「マリジャンボ」では約40種2,000尾の海水魚が泳いでいる<sup>16)</sup>。また、約100羽という日本一の規模で飼育されているマゼランペンギンが戯れる「ペンギンランド」や、潮だまりを再現した磯で生き物を手にとって見ることができる「ビーチランド」などの施設がある。毎年、夏季に「マリスタジアム」で開催されるイルカショーは人気のイベントの一つであり、長野県や群馬県などの内陸県の人々が海水浴のついでに訪れてにぎわう。

なお、2006年度の入場者数は262,380人であり、近くに海水浴場があるため8月の入場者が最も多い。県外からの入場者のほかに、近辺の小学生たちも遠足などで多数訪れる。

**金谷山スキー場** 1911年(明治44)1月にオーストリアのレルヒ少佐が、日本ではじめてスキーを教えた日本スキー発祥の地である<sup>17)</sup>。金谷山スキー場は、1960年代までスキー愛好者たちでにぎわっていたが、他の大規模なスキー場の開発や近年のスキー人口の減少にともない、ゲレンデは狭く難易度も低いので、スキー客は少なくなってしまった。しかし、冬季以外には延長450mの2つのコースがあるスーパーボブスレーが楽しめるため、主として地元の小学生の遠足地として人気がある。

**五智公園・交通公園** 五智公園では野鳥や植物の観察ができる。特に700本余りの八重桜は4月下旬から5月上旬が見頃となる。キャンプ場も設置されている。交通公園にはゴーカートがあり、D51機関車も展示されている<sup>18)</sup>。

**南葉高原キャンプ場** 久比岐県立自然公園の南葉山の中腹にあり、頸城平野から日本海までの展望を楽しむことができる。キャンプ場のほかにテニスコートやスポーツ広場もある。南葉山頂(949m)

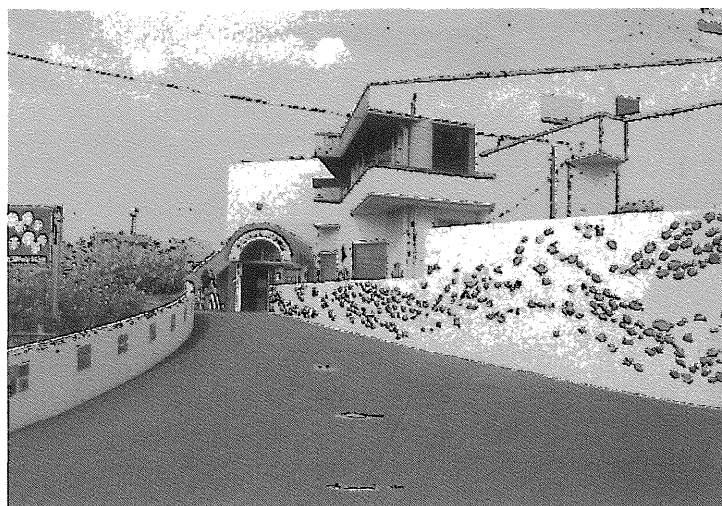


写真6 上越市立水族博物館  
2007年9月撮影

への登山道も整備されている<sup>19)</sup>。

#### (4) 酒造関係施設

**岩の原葡萄園** 1890年(明治23)に高田平野東端の不毛の丘陵地に、のちに「日本のワインの父」と呼ばれるようになった川上善兵衛によって、岩の原葡萄園が開かれた<sup>20)</sup>。敷地内には、ブドウ園や石蔵がある。石蔵内を自由に見学することができるが、当時のワインの保存施設であった雪室は特に興味深い。川上善兵衛資料館が設けられてあり、善兵衛の生涯を辿る年譜と彼がよく身につけていたといわれるシャツや帽子、そして岩の原ワインの原点である「菊水印純粋葡萄酒」の瓶や当時の製造器具などが展示されている。また、醸造所の裏手から続くゆるい坂道を進んでいくと、ブドウ園と高田平野が一望できる見晴台がある。ここには、1902年(明治35)に後の大正天皇がブドウ園を訪れたことを示す記念碑も建てられている。なお、敷地内のワインショップでは、ワイン数種類を無料で試飲できるほか、ワインをつかった菓子なども販売されている。

この場所は観光ツアーの見所の1つとして設定されていることが多いので、県外からの観光客が多い。2006年度の入込み客は51,390人であったが、その7割近くが県外からの客であった。しかし、地元の小中学校の児童・生徒が総合学習の一環として訪れることも多い。岩の原葡萄園では、樽だし新酒き酒会や工場でしか飲むことのできない発酵途中のワインであるペルレの無料試飲会など、季節に応じたイベントが企画されている。

**坂口記念館** これは「酒の博士」としても知られる応用微生物学の世界的権威である坂口謹一郎の功績を顕彰するとともに、頸城杜氏の酒造り文化を伝える施設である。1897年(明治30)に高田で生まれた坂口は、「世界の酒」や「日本の酒」、「古酒新酒」などの書物を著したほか、イノシン酸ソーダ(かつおぶしの味)の研究者としても知られている<sup>21)</sup>。館内で地酒の販売も行っている。

**よしかわ杜氏の郷** 米どころ・酒どころとして知られる吉川区は、越後杜氏の輩出地としても知られており、かつて酒造科を設置した高等学校まであったほどである。ここではこれまで蓄積されてきた酒造技術と伝統文化に基づいて生産されている地酒と乳製品の製造工程を見学することができ、試飲や販売も行われている<sup>22)</sup>。2006年度には46,600人が入場したが、その78.5%までが県内からの観光客であった。

**米と酒の謎蔵** これは高田平野の東の丘陵地に位置し、この地域の特産である米と日本酒をテーマにした博物館である。館内では新潟県の地酒について詳しく紹介している。そのほか、館内にはクイズなどが用意されており、子供から大人まで楽しむことができる。試飲コーナーでは、日本酒にまつわる話など聞きながら、上越市の銘酒を気楽に楽しむことができる。なお、併設されている歴史民俗資料室では、水科古墳からの出土品をはじめ、三和区の古代の歴史と文化を学ぶことができるということで、地元の小学生が訪れる。12月から3月までは休館となるため、2006年度の入館者も7,240人と多くない。

#### (5) 複合施設

**リージョンプラザ上越** 市民の健康と体力の増進をはかるために、さらにさまざまなレクリエーション活動や芸術・文化活動ができる施設として1984年に開設された上越市の施設である。スケー



トリックや体育館、プール、コンサートホール、会議室などがあり、隣接して上越科学館がある。2006年度の延べ利用者は513,970人であり、88.5%までが市内を中心とした県内客であり、主として上越市民のための施設といえよう<sup>23)</sup>。

**青少年文化センター** この施設も主として市内の青少年の教育や文化、健康の向上と増進の施設であり、理科や社会科を中心とした展示や体感ゲームのある展示室、星の動きが学べるプラネタリウム、体育館、地震の揺れ方を体験できる地震体験装置などがあり、料金は無料となっている。2006年度の入場者は95,770人で、そのうち99.2%までが市内を中心とした県内客であった<sup>24)</sup>。

#### (6) 物産品店

**上越観光物産センター** 北陸自動車道路の上越インターチェンジから自家用車で3分のところに上越観光物産センターがある。1階のふるさとコーナーでは、上越市の名産や特産品がそろえられている。上越市ゆかりの上杉謙信にかかわる商品や笹団子、海産物、菓子、酒類など品数は600以上にものほり<sup>25)</sup>、土産品探しに多くの観光客が訪れる。2006年度の入込み客は112,170人と多い。なお、国内最大級のステンドグラスで装飾されている2階には、レストランが併設されている。

#### (7) 朝市

上越市では高田地域に2か所、直江津地域に1か所、柿崎に1か所の4つの朝市が開催されている。このうち、高田地域には大町3丁目の二七の市と大町4・5丁目の四九の市がある。二七の市は上越市で二番目に古い朝市である。高田に入場した陸軍第十三師団から「兵隊に新鮮な野菜を食べさせたいので、定期的な市がほしい」との要望を当時の高田町長と中頸城郡長が受け、1910年（明治43）10月に現在の本町2丁目で始まった<sup>26)</sup>。開設当初は住民はもちろん、軍関係者の利用も目立った。1960年から現在の場所で開かれるようになった。朝市では野菜や干物、菓子などの食料品を扱う店が多く、客のほとんどは地元住民で、特に高齢者が多い。2007年9月27日の調査によると、79店舗



写真7 上越市高田地域の朝市(二七の市)  
2007年9月撮影

中 52 店が野菜を販売していた。郊外のショッピングセンターの進出によって、中心市街地での生鮮食料品店の多くは閉店してしまったので、朝市は高齢者にとってなくてはならぬものになった。上越市内の他の四九の市、三八の市、一の日市の市日にあわせて移動している市掛商人も多い。なお、上越市では朝市のパンフレットを発行し、観光に活用したいと考えている。

### II-3 観光資源の特徴

ここまでみてきたように、高田平野とその周辺には海岸や砂丘、ラグーン、山などの自然観光資源や、五智国分寺、明静院、浄興寺、春日山城跡、林泉寺、高田城跡など多くの人文観光資源、そして近年、温泉や水族博物館、ワイナリー、観光物産センターなどさまざまな観光施設もつくられている。特に 2005 年の 14 市町村の合併によって、多くの様々な観光資源が 1 つの行政域に含まれるようになった。例えば、旧上越市には史跡や博物館、神社・仏閣などの人文観光資源が多いが、吉川区や頸城区、三和区など高田平野東部では、酒造関連の観光施設が多い。このように、高田平野とその周辺の観光資源の第 1 の特徴は、数が多く多様なことである。

観光資源の第 2 の特徴としては、すでに『上越市第二次観光振興 5 年計画』（上越市、2001）でも指摘されているように、個々の観光資源の規模が相対的に小さく、「それだけを見に来る」魅力があるものは少ないということである。観光資源の評価を、SA 級：国際級、A 級：国レベル、B 級：地方レベル、C 級：県レベルといったように分けると、高田平野では C 級に高田公園と春日山、明静院、浄興寺の 4 つが含まれるにすぎない。また、民間企業の施設が少ないということも指摘されている。

第 3 に多くの観光資源が分散しているということである。公共交通機関が整備されていないということや、地域が広範囲であることとも関係があるが、それぞれの観光資源の地域的なまとまりや、有機的な結びつきや活用が不足している。多様な観光資源が、上越市という行政のわくで、統一的・有機的に活用されれば、一層の観光振興の可能性が生ずると考えられる。

第 4 に高田平野とその周辺には、観光資源としての認識が低い、観光資源となりうる可能性のある多くの地域資源が存在していることである。それらは、例えば、海から山までの自然環境、雪、城下町の景観、農村景観、そして多様な生活・文化・食材などである。それらの地域資源をいかに活用するかが課題であろう。

時代の変化にともない観光形態も変化している、これまでは観光地や観光施設を訪れ見て楽しむ観光が主流を占めていたが、それぞれの地域の景観や生活形態に非日常性を見つけ、それらを現地で体験したり学んだりする「教育観光」や「体験観光」が脚光を浴びようになってきている。1999 年度から当時の東頸城郡の 6 町村では、小・中・高校生などの団体を主な対象とし、農家に宿泊し、農作業を体験してもらって越後田舎体験事業を開始した。これは、地域の自然と暮らしと人を体験学習の素材とした「体験観光」で、これを通じて地域の活性化を図ろうとするもので、上越市と合併した現在でも引き継がれている<sup>27)</sup>。

### Ⅲ 上越市の観光振興政策

#### Ⅲ-1 上越市第一次・第二次観光振興5か年計画

上越市では1996年からこれまで3回の観光振興5か年計画がまとめられた。これまでの上越市における観光開発は、この5か年計画に基づいてなされている。第一次の上越市観光振興5か年計画(1996～2000年)においては「謙信浪漫 越後・くびき野・庭園都市・上越」を基本コンセプトとし、それに基づく形で観光的な魅力を増すような観光拠点の整備や、多彩な手法を活用した宣伝活動の強化、観光関係者や市民の積極的な協力による受け入れ態勢の整備、市民参加の観光振興事業の展開、広域観光の宣伝・受け入れ態勢の強化といった、5つの施策が提案された(上越市商工観光部商工観光企画課, 1996)。そしてこれらを基本として、各観光施設の整備等が行われた。

上越市第二次観光振興5か年計画(2001～2005年)においては、上越市第一次観光振興5か年計画の方向性を踏襲し、さらにそれを発展させた形でより具体的な観光振興がはかられた。再構築された基本コンセプトは「ふるさと自慢からおもてなしの観光ビジネスへ 謙信浪漫 越後・くびき野・庭園都市・上越」とされた。そしてこのコンセプトを実現するために、(1)市民を主人公としてソフト・ハードの充実を図っていくこと、(2)適宜観光ビジネスを意識し、可能な限り“自立・自走”できるようにすること、(3)農の風景との共存を図ること、(4)山の魅力と海の魅力のハーモニー：“楽山楽水郷”をアピールすること、(5)景観づくりにおいては、“作庭の作法”に乗っかって進めること、(6)市の花である桜を活用し、“桜都上越”を目指すこと、の6点が定められた(上越市, 2001)。

#### Ⅲ-2 上越市第三次観光振興5か年計画

2004年の上越市と周辺町村との合併は、観光振興においても大きな転機となった。すでに述べたように、まず、上越市では2005年に観光振興課と観光企画課の2つを設置した。上越市第三次観光振興5か年計画(2006～2010年)は、「上越市の知名度向上」と「交流人口の拡大」を2大テーマとし、「観光立市」上越という最終目的の実現に向けた取り組みを定めた。さらに観光振興のためのコンセプトも「魅力あふれる 越後ほんもの体験のまち・上越市」と定め、従来の観光資源の充実に加え、近年注目されているグリーンツーリズムや、体験観光の推進も計画された。そのため、(1)顧客ニーズの把握、(2)戦略的プロモーションの実施、(3)新たなマーケットの開拓、(4)観光資源のさらなる活用、(5)広域連携の推進、(6)体験交流型観光の推進、(7)組織づくり・人づくり、(8)観光立市に向けた意識醸成、(9)受け入れに必要な観光基盤の整備といった9つの基本方針が定められ、それぞれの方針についての具体的な施策が考えられた(上越市産業観光部観光企画課, 2006)。

多様化する観光客のニーズを的確に把握することを基本方針として、旅行者のニーズ調査を実施することが具体的な施策としてあげられている。また、「知名度の向上」を目的として定期モニターツアーを実施することや、観光プロモーション事業の強化があげられている。他にも上越市の観光資源自体をさらに価値あるものにするために、まちなみの活用や、歴史・文化資源などの活用が施策としてあげられている。さらに「交流人口の拡大」を達成するために、上越市だけでなく、他都市との交流の

推進や広域モデルルートの開発などが考えられている。近年観光客のニーズが「見る」観光から、「体験する観光」へと移行していることを踏まえ、上越市でも体験交流型観光の推進も基本方針としてあげられている。

### Ⅲ-3 上越市における現在の観光振興の試み

上記の観光計画を受けて、目的の1つである「知名度の向上」を達成するために、上越市は2007年度を「上越ふるさとアピール年間」とし、様々な宣伝活動を行った。2007年は親鸞が上越に上陸して800年の節目の年であるとともに、上越市ゆかりの上杉謙信が登場するNHK大河ドラマ「風林火山」の放送など、上越市を全国に宣伝する絶好の機会であったことから、大都市圏での宣伝活動が展開された。国内での宣伝活動以外にも、体験観光を推進する韓国や台湾などでの宣伝活動も積極的に進められた。体験観光は国内の児童・生徒やその家族を主な対象とするだけでなく、海外からの観光客を誘致するにあたって、効果的なものになりつつある。

さらに、上越市第三次観光振興5か年計画のテーマでもある「交流人口の拡大」を目指して、2005年10月に長野市、2006年5月に佐渡市との間で観光やイベントの案内などを相互に支援・協力する協定を締結した。上越市は新潟県内にあるが、実際の交流は新潟市よりも長野市との方が多く、以前から関係が深かった。また、直江津港があることから佐渡市とも交流が盛んであった。この協定によって、広報誌やホームページなどに他市の情報が載るようになり、いずれの市にとっても情報の入手が容易になった。また、2007年9月には大河ドラマ「風林火山」の放映がきっかけとなって、上越市と長野市、甲府市の3市と集客プロモーションパートナー都市協定を締結した。

上越市における観光振興策として、各種観光案内の発行と配布がある。なかでも注目されるのが、いくつかの観光資源を地域テーマ別にまとめた観光ルート案内やそれぞれの施設に関する説明である。観光ルートの案内としては、上越市から発行されている「さんぽ」がある。これは上越市第二次観光振興5か年計画で提案されたもので、城下町高田地域を取り上げたものや、直江津地域を扱ったものがある。また、春日山城周辺を案内する「春日山城跡めぐり」や親鸞とその妻の恵信尼に注目した「ゑしんと親鸞」などがある。高田の町並みを重点的に追っている案内としては「高田まちなみ歴史散歩」や「寺院めぐり」がある。これらの案内は、市役所や観光案内所のみならず該当する史跡や施設に置いてあり、気軽に入手できるようになっている。地図があつて、それを見ながら、自分で1つのテーマや地域を巡れるように工夫されているが、地図の形がゆがんでいたり縮尺が配慮されていなかったりして、実際には目的地に到達しにくい場合がある。このような史跡を中心とした観光案内のみならず、上越市内の温泉を案内する「湯めぐりガイドマップ」や、上越市全体の観光資源を紹介する「上越観光ガイドマップ」、上越市の4つの朝市を説明した「上越の朝市」も発行されている。

上越市観光企画課で上越市の観光の中心と考えているのは「上杉謙信」である。それは、全国的に有名な人物であり、謙信に関わる史跡は観光資源として価値のあるものが多く残されているからである。さらに最も大きな理由は、他地域にはなく上越市に強く関わっている人物であるからである。現在の上越市の観光においては、上杉謙信を中心とした人文観光資源を巡る従来型の観光を一層充実さ

せるとともに、農村体験や雪国体験などの体験観光を中心とした地域資源の活用を推進していく、といった方向性が考えられている。また、地域住民の「おもてなしの心」の向上を図ることで、ただ「見せる観光」ではなく、「思い出に残る観光」が目指されている。

#### IV むすびにかえて—高田平野とその周辺地域における地域資源の観光資源化—

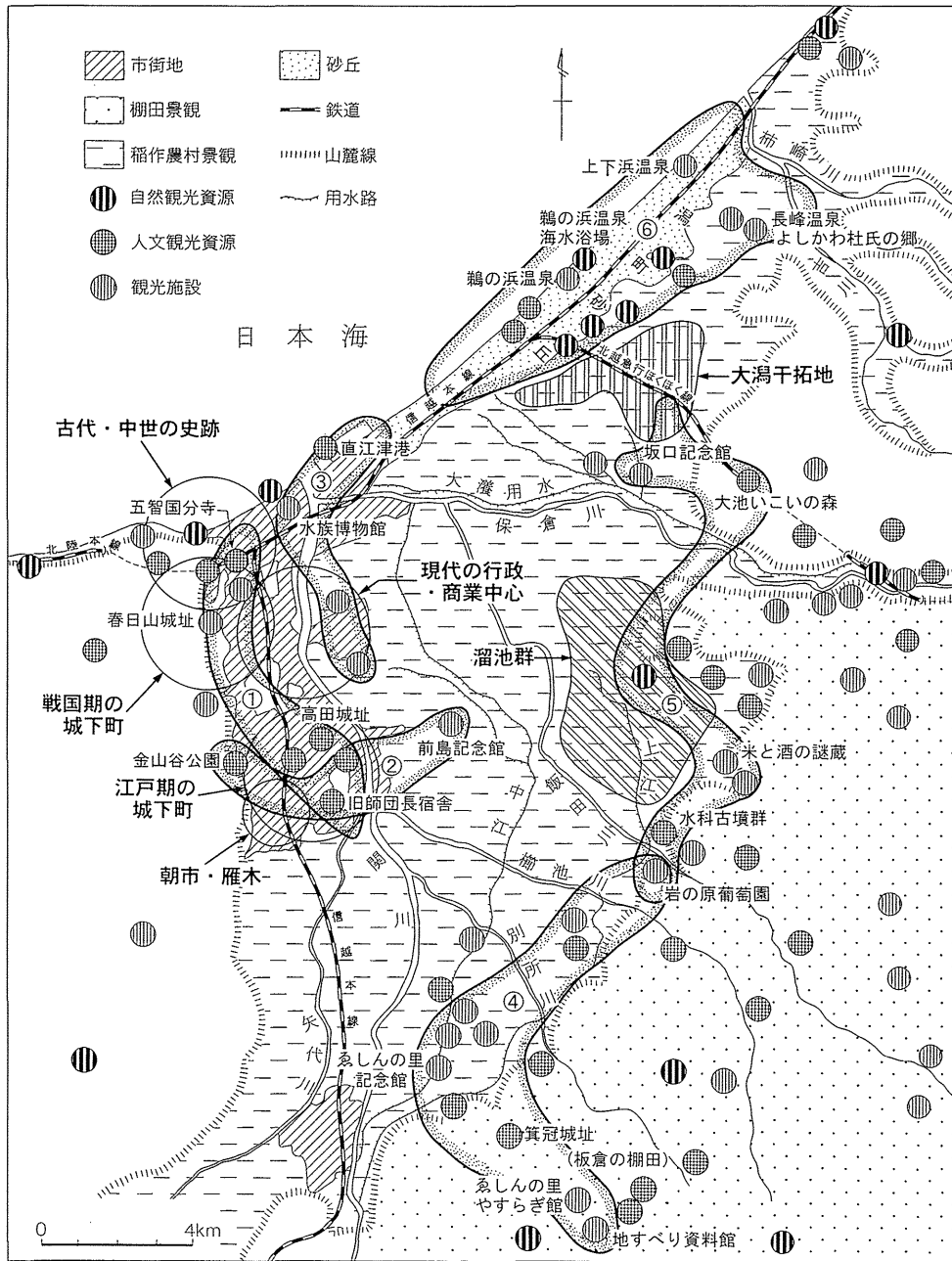
高田平野とその周辺の観光振興を考える場合、多様であるが小規模で分散した観光資源をいかに相互に結びつけるか、その際に、どのように地域資源を取り込むか、そしてそれを実現するために、教育観光や体験観光といった視点をどのように取り入れるかが、今後の課題となろう。

それではどのような地域資源が活用できる可能性があるのだろうか。その例としてまずあげることができるのが、都市空間と農村空間である。高田平野の都市と農村は一般の住民が日常生活を送る場所であり、地元では何の変哲もない生活空間であるが、他地域からの訪問者にとっては、極めて特徴的な存在であり、注目すべきものである。また、面的に広がっており、これらの観光資源化によって、点的な従来の観光資源を結びつけることができるようになる。

都市空間として、まず高田の城下町をあげることができよう。これはすでに述べたように江戸初期の都市計画が現在の都市構造を明確に規定しているものである。城と侍屋敷、町人町、寺町という構成が、現在でも生きているのである。さらには、城地の構造、町人町の雁木や雪下ろしのためのはしご、用水路といった景観要素、日々の生鮮食料品を人と人が対話しながら売買する朝市、由緒ある寺院が66も集中している寺町など、都市を構成するそれぞれの部分地域にも大きな魅力がある。

高田平野には古代から現代までの都市空間が重なりあっている。これらを読み解くのも魅力であろう。最も古いものは直江津地域の国府（場所不明であるが）と国分寺を核とした古代から中世の都市空間で、現在でも多くの史跡が残されている。次が、春日山城跡を核とする中世末期から戦国期の都市空間であり、ここにも多くの史跡が残されている。次が近世の高田の城下町、さらには現在の市役所を中心とする業務中心と北陸自動車道路上越インターチェンジ付近の大規模な商業施設を核とする現代の都市空間である（第4図）。

他方、農村空間として高田平野全体に広がる稲作農村の景観、それを支えている江戸期に開削された中江や上江、そして大灌用水をあげることができ、それらは永年にわたって農民が資本と労働力を投入して営々とつくりあげたある種の文化財としての価値もっている。三和地区に集中する上江の下流の溜池群は、1984年に国営関川水利事業が完成するまでは、江戸期から続く水利慣行によって夜間しか給水されないために、一旦水を溜めておいて昼にそれぞれの水田に配水するために造られたものであった（田林、1990）。潟町砂丘では明治末期に、それまでの生業であった製塩業と漁業の不振によって、農業開拓が始まり、その際に共有林野を短冊型に分割した名残が現在でもみられる。その背後にある大小の湖沼群は、江戸初期に干拓された大潟の名残である。さらに東頸城丘陵には地すべり地形が広がり、地すべりによって平坦化した土地に多くの棚田が、中世末期から江戸期にかけてつくられ、魅力的な景観をもたらしている。このように、現代の農村景観とそれがいかにつくられたかということが、1つの観光資源となるであろう。さらには、岩の原葡萄園のワインや米と酒の謎



第4図 高田平野とその周辺における観光振興への地域資源の活用(試案)

- ①古代と中世、戦国期、江戸期の都市空間を比較するルート
- ②明治期の都市空間をたどるルート
- ③現代の都市空間を探るルート
- ④稲作農村景観とそれを支えた農業用水を理解するルート
- ⑤上江下流部の水不足地域と酒をめぐるルート
- ⑥温泉を楽しみ砂丘開発を理解するルート

『上越市第三次観光振興5か年計画』と聞き取りより作成

蔵や坂口記念館、よしかわ杜氏の郷などがテーマとしている日本酒といった特産品も重要な観光資源である。また、積雪によって冬季の労働に限られるため、酒造りの技術を蓄積して出稼ぎにでかけたという農村の伝統的な就業形態も（田林，2007）、上記の施設では克明に説明しており、これもまた観光資源化できる可能性がある。

以上の都市空間と農村空間の観光資源化を意識して、既存の観光資源を結びつけて観光振興をはかるための試案が第4図である。まず、①は古代と中世の都市空間から戦国期の都市空間、そして江戸期の都市空間を比較するルートである。②は明治期以降の都市空間をたどるルート、そして③は新しい行政中心とショッピングセンター、そして直江津港までの現代の都市空間を探るルートである。④は地すべり地形を理解し、それを活用した棚田景観を見て、さらには山間部の棚田開発によって水不足に陥った平野部で開削された上江をたどり、現代の稲作農村景観を探ろうというものである。旧安塚町や旧浦川原村などの山間地域で試みられてきた農業体験などを高田平野で取り入れれば、観光が一層多様化すると思われる。⑤は上江下流部の水不足地域と酒を巡るルートである。⑥は温泉を楽しむ砂丘の開発を理解するルートである。

ここに示したのは、例に過ぎず、新たな地域資源の評価によって、異なった可能性も多いと考えられる。また、これらのローカルなルートのみならず、都市空間と農村空間、海と山、長野市や甲府市といった県外の他都市と結ぶルートも考えることができよう。いずれにしろ、永年の住民の生活のなかで培われてきた景観や産業、産物、生活文化を評価し、それらを学ぶあるいは体験するという視点での観光振興が今後ますます重要になってくると考えられる。

本研究を行うにあたって、上越市観光企画課の若山秀樹氏をはじめとした上越市役所の方々、坂口明広氏をはじめとする大池いこいの森ビジターセンターの皆様、上越市の様々な観光施設の方々、そして市街地や農村で聞き取りに応じていただいた住民の皆様にお世話になった。上越教育大学の志村 喬准教授には現地でさまざまな示唆をいただいた。また、英文要旨の校閲では東京学芸大学の矢ヶ崎典隆教授にお世話になり、資料整理に関して筑波大学大学院生の大石貴之氏の助力を得、製図を筑波大学技術専門職員の宮坂和人氏に依頼した。以上の方々には心からお礼申しあげる。なお、この報告のとりまとめにあたって、平成19年度科学研究費補助金基盤研究(A)「商品化する日本の農村空間に関する人文地理学的研究」(代表者：田林 明、課題番号：19202027)の研究費の一部を使用した。

#### 注

- 1) 上越市観光企画課：『港町、直江津 さんぽ』パンフレット
- 2) 上越コンベンション協会：『文化財でめぐる えしんと親鸞』パンフレット
- 3) 新潟県上越市寺町まちづくり協議会：『上越寺院めぐり 高田寺町界隈寺院ガイド』
- 4) 上越市観光企画課：『国指定史跡 春日山城跡めぐり』パンフレット
- 5) 越後春日山林泉寺：『越後春日山林泉寺』パンフレット
- 6) 春日山城総鎮守春日神社：『春日山城総鎮守春日神社』パンフレット
- 7) 上越市歴史・景観まちづくり推進室：『あるけばわかるまちの魅力 高田まちなみ 歴史散策其之式 まちの歩き方』
- 8) 新潟県上越市(2007)：『上越市観光ガイドマップ』パンフレット
- 9) 新潟県大潟観光協会：『上越市鶴の浜温泉－上越後日本の魚処・地引網－』パンフレット
- 10) 新潟県上越市(2007)：『上越市観光ガイドマップ』

パンフレット

- 11) 上越市埋蔵文化財センター：『上越市埋蔵文化財センター』パンフレット
- 12) ぬしんの里記念館：『ぬしんの里記念館』パンフレット
- 13) 上越市観光ホームページ・上越観光ネット・上越観光 net ホームページ：<http://www.city.joetsu.niigata.jp/kankou/index.html> (2007年12月24日最終確認)
- 14) 上越市：『日本スキー発祥記念館』パンフレット
- 15) 上越コンベンション協会ホームページ：<http://web.joetsu.ne.jp> (2007年12月24日最終確認)
- 16) 上越市立水族博物館：『上越市立水族博物館』パンフレット
- 17) 上越コンベンション協会ホームページ：<http://web.joetsu.ne.jp> (2007年12月24日最終確認)
- 18) 上越市観光企画課：『港町、直江津 さんぽ』パ

ンフレット

- 19) 上越コンベンション協会ホームページ：<http://web.joetsu.ne.jp> (2007年12月24日最終確認)
- 20) 上越市：『岩の原葡萄園』パンフレット
- 21) 上越市：『坂口記念館』パンフレット
- 22) 上越市：『よしかわ杜氏の郷』パンフレット
- 23) リージョンプラザ上越ホームページ <http://www.city.joetsu.niigata/sisetsu/region/index.html> (2008年1月29日最終確認)
- 24) 青少年文化センターホームページ <http://www.city.joetsu.niigata/sisetsu/syukai/center.html> (2008年1月29日最終確認)
- 25) 上越市：『上越市観光物センター』パンフレット
- 26) 新潟県上越市：『上越の朝市』パンフレット
- 27) 越後田舎体験推進協議会：『越後田舎体験』パンフレット

#### 参考文献

- 石田幸太・伊藤真理子・梅原香那 (2008)：上越市における観光資源活用の可能性。自然と暮らし, 15(印刷中).
- 久保田好郎 (1980)：上越の中心地－古い姿を残す高田－. 久保田好郎・磯谷清人編『新潟県の地理散歩－上越編－』野島出版, 35-44.
- 頸城村史編さん委員会編 (1988)：『頸城村史』頸城村. 財団法人日本交通公社編 (2004)：『観光読本第2版』東洋経済新報社.
- 上越市商工観光部商工観光企画課 (1996)：『上越市観光振興5か年計画』上越市.
- 上越市 (2001)：『上越市第二次観光振興5か年計画』上越市.
- 上越市産業観光部観光企画課 (2006)：『上越市第三次観光振興5か年計画』上越市.
- 高田市史編集委員会編 (1958)：『高田市史第一巻』高田市役所.
- 田林 明 (1990)：『農業水利の空間構造』大明堂.
- 田林 明 (2007)：日本農業の構造変容と地域農業の担い手. 経済地理学年報, 53, 3-25.
- 直江津捕虜収容所の平和友好記念像を建てる会編 (1996)：『太平洋にかけの橋 捕虜収容所の悲劇を超えて』上越日豪協会.
- 中山富士雄 (1980)：変わりゆく潟町砂丘. 久保田好郎・磯谷清人編『新潟県の地理散歩－上越編－』野島出版, 1-10.
- 新潟県上越市 (2006)：『上越市市勢要覧』新潟県上越市.
- 新潟県上越市 (2007)：『上越市観光ガイドマップ』(パンフレット) 新潟県上越市.
- 新潟県高田市教育委員会 (1914)：『高田市史』新潟県高田市教育会.
- 花ヶ前盛明 (1995)：『にいがた歴史紀行 14 上越市』新潟新報事業社.
- 林 琢也 (2007)：青森県南部町名川地域における観光農業の発展要因－地域リーダーの役割に注目して－. 地理学評論, 80, 635-659.
- 尾留川正平 (1981)：『砂丘の開拓と土地利用－付、デルタと高距限界地帯の開発－』二宮書店.
- 溝尾良隆 (2001)：観光地と観光資源. 岡本伸之編『観光学入門－ポスト・マスツーリズムの観光学－』有斐閣アルマ, 119-147.
- 溝尾良隆 (2003)：『観光学－基本と実践－』古今書院.
- 溝尾良隆 (2007)：『観光まちづくり現場からの報告』原書房.
- 山村順次 (2006)：日本における観光の現状と役割. 山本正三・谷内 達・菅野峰明・田林 明・奥野隆史編『日本の地誌2 日本総論II (人文・社会編)』朝倉書店, 360-364.
- Butler, R. (1998)：Rural recreation and tourism. Ilbery, B. ed. *The Geography of Rural Change*. Longman, 211-232.
- Woods, M. (2005)：*The Rural Geography*. SAGE Publications.



## Development of Tourist Industry Based on Regional Resources in the Takada Plain and its Vicinity, Niigata Prefecture

TABAYASHI Akira, ISHIDA Kota\*, ITO Mariko\* and Umehara Kana\*

Recently tourist industries have become prosperous in Japan as various types of tourism are introduced. Considering that the tourism for practical experience and educational purposes especially attracts many people, it is important to discover and grow new tourist resources. This study attempts to evaluate ordinal regional resources such as rural and urban landscapes, local industries, traditional handicrafts, and special local products, in order to develop tourist industry in the Takada Plain and its vicinity, Niigata Prefecture.

The study area, situated in the central part of the country and facing the Sea of Japan, is blessed with varied natural and cultural tourist resources, while many tourist facilities have been newly constructed or improved in the last ten years. However, the scale and attractiveness of each tourist resource is not large enough to attract many tourists from all over the country; most visitors come from the neighboring prefectures. In addition, these tourist resources are dispersed and are not mutually connected.

The places of historical interest related to *Uesugi Kenshin*, a famous military commander of the Age of Civil Wars, are especially noticed in this region. The close relationships among the ruins of his Kasuga-yama Castle and its old castle town, the ancient and medieval historic places, the castle townscapes of Takada constructed in the early seventeenth century, and the present city landscapes of Joetsu will greatly increase tourist demand in the Takada Plain. The other way of promoting tourism is to evaluate and utilize ordinary rural landscapes, rural heritages, and rural products, such as the beautiful landscape of rice growing villages in the Takada Plain and the terraced paddy fields in the Higashikubiki hills, historical places of Uwae, Nakae and Obuke irrigation canals, reclaimed lagoons in the early seventeenth century, newly settled sand dunes at the beginning of the twentieth century, and wine and sake breweries. These resources have a great potential to attract numerous tourists from all over the country. Thus, successful commodification of rural spaces for tourism, leisure and recreation plays an important role in promoting the tourist industry in the Takada Plain and its vicinity.

Key words: Joetsu City, Takada Plain, tourism promotion, tourist resources, regional resources, commodification of rural spaces

---

\* Graduate student, master program of education